

[原著論文]

再考「オシリスシャフト」  
——クフ王ピラミッド内部構造, 複合体, シャフト,  
地下通廊との比較検討から——

平山 洋・守屋誠司

要 約

エジプト・ギザの三大ピラミッドの一つ、カフラー王のピラミッド参道のおよそ中間地点を横切る地下通廊の下に約30mの深さのシャフトが発見された。三層からなる最初のシャフトの位置は地下通廊南側入口近くの西側、第2層は南北軸に平行に8m程北に、最下層に通じる第3層はそこから2m程北東にあり、カフラー王ピラミッド参道の幅中程と地下通廊が交差する位置にあたる。シャフトの位置はこの交差点に合うように修正されており、シャフトと地下通廊が密接に関係していることを示唆している。クフ王ピラミッド内部ではシャフトは下降通廊、大回廊の結び目の西壁奥から垂直下方向に、途中で斜めになりその終点は大回廊と水平通廊結び目に位置する。途中で造られた洞穴は南について東に拡張され、シャフトが掘り始められたところで放棄された形跡があり、このシャフトは大回廊の通廊が実際に始まるところに位置し、東側への拡張は恐らく道幅中程を模索したものと思われる。ピラミッド複合体の河岸神殿・参道・葬祭神殿・奉納神殿はピラミッド内部の埋葬室・控えの間・通廊の関係と捉えることが出来、クフ王ピラミッド内部のシャフトの位置の変遷はオシリスシャフト三層の位置の変遷との共通性がみられる。また、オシリスシャフトはその位置と地下通廊から、クフ王ピラミッド及びその複合体との南北軸、カフラー王ピラミッド及びその複合体との東西軸の二つの軸線を考える必要がある。南北軸に関して、カフラー王のピラミッド及びその複合体の配置はクフ王ピラミッドが影響しており、オシリスシャフトも恐らく建造期の古王国時代から既にクフ王ピラミッド及び衛星ピラミッド、王妃ヘテプヘレスのシャフト墓等ピラミッド東側の影響を受けていると推測できる。本稿ではシャフトと地下通廊、参道、試し通廊、ピラミッド内部の通廊、東側墓地の遺構、衛星ピラミッドを比較検討することによってオシリスシャフトの造営時期とその性格をより明らかにする。

キーワード：オシリスシャフト, 赤色研磨土器 (第6王朝), 地下通廊, クフ王ピラミッド, 試し通廊

はじめに

オシリスシャフトはエジプト・ギザ三大ピラミッドの一つ、カフラー王のピラミッド参道中程に位置し、参道の下を垂直に横切るトンネルの下に掘られた縦坑である。シャフトは1945

年に発見されていたが、地下からの大量の水が含まれており研究者が近づくのは容易ではなかったため報告書が刊行される事はなかった。しかし1999年にハワスは発掘調査を開始し、三層からなるシャフトが確認された。シャフトから第6王朝の土器群が検出され、遅くともこの時期に既に造られ始めたかとハワスは考えている。ハワスはこのシャフトを「オシリスシャフト」と呼び、その理由を主に三点を挙げている。1. 新王国時代以降ギザ台地は「オシリスの家」と呼ばれpr「家」の文字が坑内から発見された。2. 最下層の第26王朝の石棺が置かれている状態は、アビュドスやデンデラに見られる水溜まりの中心に石棺が置かれる、所謂「オシレイオン」の形状と類似している。3. ギザ台地でオシリスが普及した第6王朝と時期的に一致する点である (Hawass 2007)。しかし、筆者はこれまで第5王朝後半とされていた最古のオシリス神名に関する新説を提示した (平山 2011)。この説はオシリス神名が遅くとも第4王朝末期には登場している事を示唆しており、神名のある銘文の墓主はカフラー王 (Khafre) の息子である。このことから、オシリスシャフトとオシリス神名が登場する時期との関連性を検討する必要があると考えた。オシリスシャフトの入口は、カフラー王のピラミッド参道中程を南北に横切る地下通廊の下にあり、最下層に通じるシャフトは参道と地下通廊が交差する位置の下にある。オシリスシャフトのある地下通廊は、クフ王ピラミッド複合体の南に位置し、クフ王の衛星ピラミッド及びクフの母であるヘテプヘレス1世 (Hetepheres) の墓や、特にクフ王ピラミッド内部の通廊の模型とされる、いわゆる「試し通廊」に着目する必要があるであろう。「試し通廊」には地上から突き抜ける形でシャフトが築かれており、オシリスシャフトの構造と類似している。尚、この構造は第3王朝の階段ピラミッドと南墓の関係に既にみられ、試し通廊はピラミッド内部の縮図であり、ピラミッド内部の通廊はオシリスシャフトと関連性があるかもしれない。

カフラー王のピラミッド内部構造は、クフ王の後継者ジェドエフラーのアプロアシュのピラミッドで埋葬室がピラミッド底面より低い位置になり、その影響がみられる (Stadelmann 1985: 50, 99-101参照)。参道直下にシャフトがあるのはカフラー王だけであること、カフラー王のピラミッド内部にシャフトが見られないことがオシリスシャフトの建造に深く関係していると筆者は推測する。カフラー王の後継者であるメンカウラー王のピラミッド内部にはシャフトがみられ、重要な起点に向かって修正されるというクフ王内部のシャフト (ピット)、オシリスシャフトに共通した特徴がみられる。本稿ではオシリスシャフトの詳細を示すとともに、その造営年代と性格をクフ王のピラミッド及びその周辺遺構との関係である南北軸、カフラー王のピラミッドとの東西軸の両面から考察を試みる。まずハワスの報告書を整理しシャフトの全容を示すことから始める。

## 1 オシリスシャフトについて

シャフトの入口はカフラー王の参道中央付近を南北に横切る地下通廊にある (図1)。ハサン (S.Hassan) は地図上で通廊を「地下通廊」(subway) と記している (Hassan 1950)。ハワ

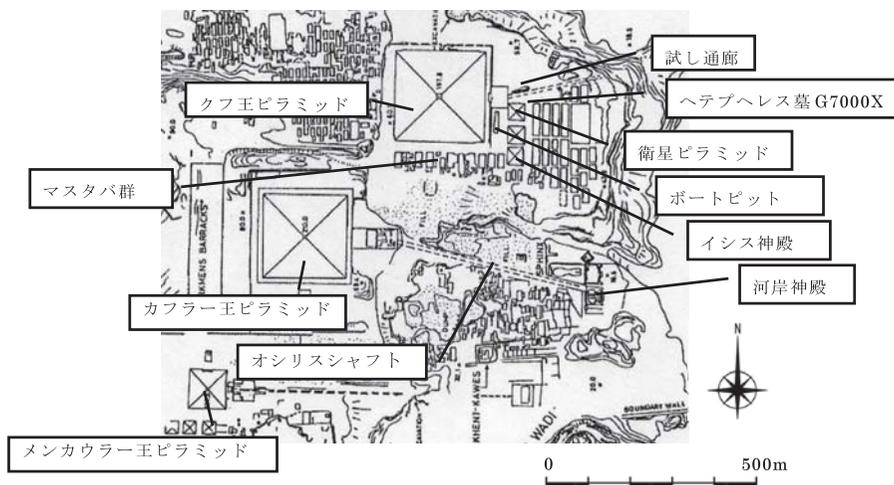


図1 ギザ台地

スはこの地下通廊にはさほど着目しておらず、詳細な記録が為されていない。この通廊はクフ王参道中央付近を横切る地下通廊と同様に参道の南北を横切るための通廊と考えられるが、クフ王のものと違い、参道に対して直交しているのではなく、南北軸に平行せず、丁度その間の方向を向いており、その延長線上にはクフ王のピラミッドの南東角、或いは近年発見された衛星ピラミッドGI-d (Hawass 1996) の辺りから東墓地に向いている (図1; 図2)。尚、通廊の規模はクフ王参道の通廊、東墓地地域の試し通廊 (trial passage) 又は模造通廊 (replica passage) とほぼ同じである。通廊の東側、参道の南にはヘメトラ (Hemetre) 墓、ラケトラ (Rhaketre) 王妃の墓への通廊など古王国時代の遺構が密集している (図2)。切り合い関係から地下通廊が出来たあとシャフトが掘られたとみられるが、その時間差が直後、つまりほぼ同時に造られたのか、かなり後なのかを示す具体的な証拠は見当たらない。つまり、オシリスシャフトと地下通廊を一体として捉えるか、別々の建造物と捉えるかの検討をする必要がある。オシリスシャフトの位置は地下通廊の位置によって決定されていることは確かであり、地下通廊の建造期はカフラー王参道を横切る性格から、カフラー王のピラミッド複合体建造期の第4王朝に遡る可能性も視野に入れる必要がある。では、まずハウスの報告をもとにシャフト内部を見ていく。

シャフトは以下の構造に分類される。1. 入口部 2. シャフトA 3. 第1層と部屋A 4. シャフトB 5. 第2層とHを通じた部屋B 6. シャフトC 7. 第3層と部屋I (図3)。第1層、第2層は南北軸、第3層部屋Iは北西方向 (クフ王ピラミッドの方角) に軸がある (図3; Hawass 2007: 389, Fig. 6)。

(1) オシリスシャフトの入口はカフラー王の参道の下を南北に走る地下通廊の床面にある。

カフラー王の南北の参道に、カフラー王の葬祭神殿と大スフィンクスの大凡中間地点に

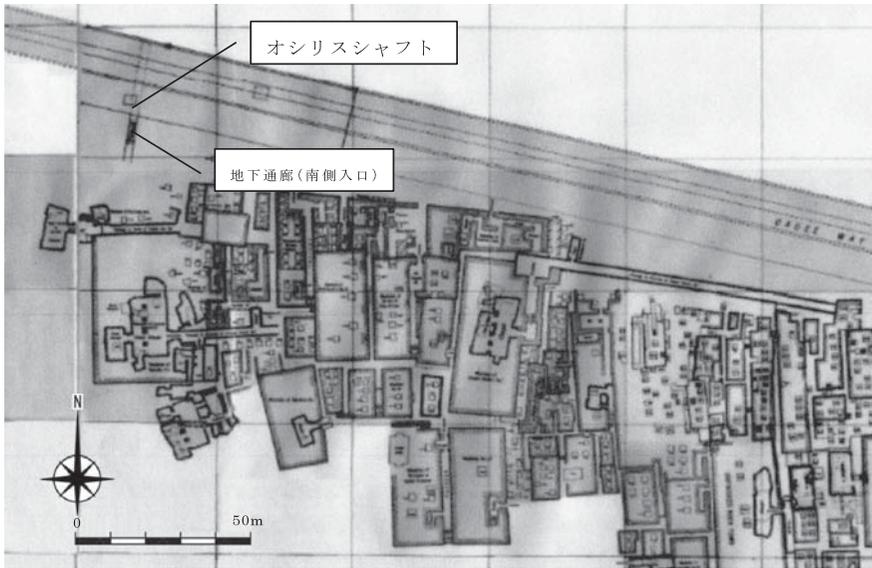


図2 オシリスシャフト周辺遺構 (Hassan 1950: Plan7-8Qに加筆)<sup>1)</sup>

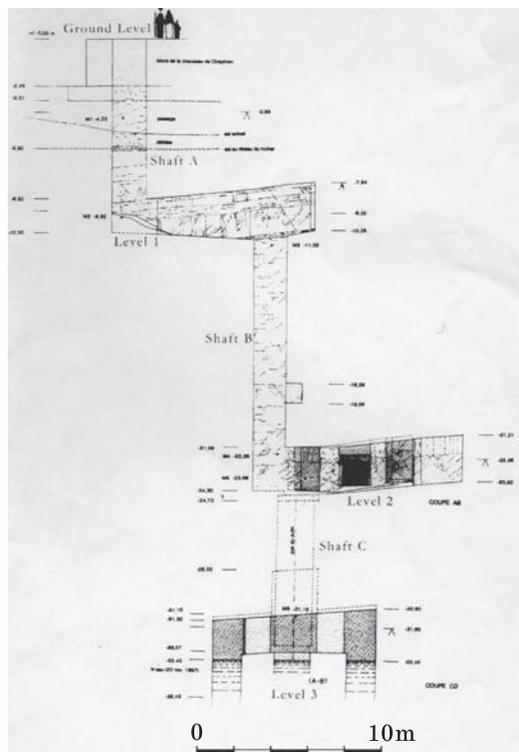


図3 オシリスシャフト・セクション図 (Hawass 2007: 382 Fig. 2に加筆)

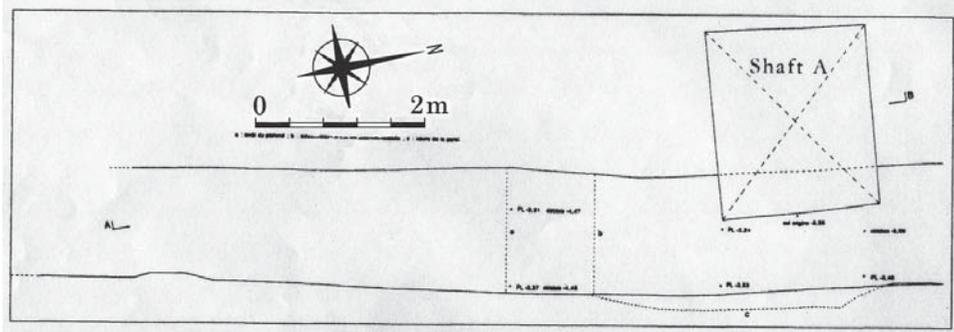


図4 シャフトと地下通廊 (Hawass 2007: 380 Fig. 11 に加筆)

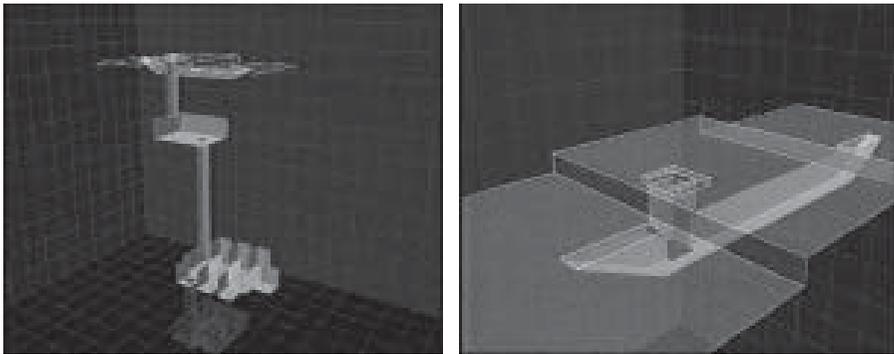


図5 CGによるオシリスシャフト及び地下通廊の復元図<sup>2)</sup>

位置する (Hawass 2007, 381) 通廊の西壁に位置するシャフトAから入り、複合体は三つのシャフト (A, B, C) が三つの異なるレベル (1, 2, 3) に通じている。レベル2と3には附属の部屋ある (図3, 図5)。シャフト入口は地下通廊の南側入口に近い位置にある。

- (2) シャフトAはオシリスシャフトに通じる最初の入口である。カフラー王のピラミッド参道直下に位置し開口部から垂直に10.30mの深さがある。参道の下には南北に走る地下通廊がありその西壁から0.60mのところ南側入口がある。シャフトは荒削りに造られており、長方形の部屋A (レベル1) に通じる (図4)。
- (3) 部屋Aは幅8.60m×最大3.85mの広さで高さは最大で2.70mである。この部屋から遺物は発見されていない。
- (4) 次にシャフトBは開口部が長さ一辺1.90mの正方形で深さが13.25mある。このシャフトの深さ8.33mの地点の北壁面に幅1.10m高さ1.80m奥行き0.70mの窪み (壁がん) が見られる。

- (5) シャフトBを降りると部屋B(レベル2)がある。部屋Bは壁面から6つの小部屋(C~H)が掘り込まれており、部屋CDEが西側に、部屋Fが北側、部屋GHが東側に付属している。これらの部屋の内4つの部屋に主に第26王朝に年代付けられる遺物が発見され、部屋Gには同時代と考えられる石棺が発見された(Hawass 2007: 383)。この石棺は玄武岩製で長方形の形をしており前部が掘り込まれている。遺物は全て末期王朝時代の人骨片、ブルーファイアンス製のウシャブティや土器片で、石棺の周囲に見られた。石棺は長さ250cm、幅120cm、高さ105cmで蓋は高さが26cmである。
- (6) シャフトCは第2層の埋葬室と同じような大きさの長方形の窪みの床面から第3層に降りている。
- (7) シャフトCを降りるとそこは第3層であり西に部屋Iと呼ばれる約9m四方の正方形に近い形をした部屋がある。部屋の床面には壁から約1.5m(最大2m、最少1.3m)の位置に四角いトレンチ状の溝があり、その中央にさらに長方形のピットがあり、そこに石棺が収められていた。石棺には骨の残骸が残されており、オシリスを象った片岩製のアミュレット(護符)が二つ墓から発見された。スカラベ(主に心臓の形をした)とジェド柱の形をしたアミュレットにより墓は末期王朝時代に年代付けられるとハワスはしている。

石棺は長さ228cm幅108cm(内側長さ200cm幅72cm)で黒色玄武岩製の人型棺でハワスは型式学的に第26王朝に属すると考えている。石棺の蓋はシャフトCの床面で発見された。ハワスによると、この第3層は北西方向クフ王のピラミッドの方角に向いていて、その先に発掘途中の通路が延びており、ピラミッド下部の控えの間に通じ、王の実際の埋葬室がある可能性を指摘している<sup>3)</sup>。またこの第3層は水没しており、石棺の蓋の上部が僅かに見える程まで水かさがあった。石棺がピットに埋まった形で安置されその周りを水が覆っている。この形式はアビュドスのセティ1世葬祭殿に付属するオシレイオンにみられ、デンデラにも見られる。

## 第6王朝の赤色研磨土器

オシリスシャフト最初の建造期を示す最も重要な証拠となる白色の斑点付き赤色研磨土器が第3層から検出された。ハワスは型式学的に古王国時代、特に第6王朝に属すると指摘しており、オシリスシャフトの最初の建造時期を古王国時代第6王朝とする根拠としている(Hawass 2007: 390)<sup>4)</sup>。

ハワスは「オシリス」のシャフトとする3つの理由を挙げている。1. 新王国時代以降ギザ台地は「オシリスの家」と呼ばれ(Zivie 1991: 248-260; 1984: 145)「家」prの文字が坑内から発見された2. 最下層第26王朝の石棺はアビュドスやデンデラに見られる水溜まりの中心に石

棺が置かれる、所謂「オシレイオン」と形状が類似<sup>3</sup>。シャフトCから検出された土器群は第6王朝に属すると考えられ、ギザ台地でオシリス信仰が普及した第6王朝と時期的に一致する点である。また、シャフト地下通廊の北にはクフ王衛星ピラミッドGI-c(Hawass 2007: 396註9)があり、グラフィートにイシスの場所に埋葬とある(Hawass 2007: 392; 1987: 42; Lehner 1997, 116)。GI-cに附属するイシスの埋葬場所(Jones & Milward 1982; Zivie 1991)はオシリスシャフトの方角である南に向いており(Hawass 2007: 392)、第26王朝の碑文によれば「オシリスの家」の北西にあるイシスの家」とある(Breasted 1906: 85, S180)。「イシスの家」がCI-cの葬祭神殿の延長にあるイシス神殿とすれば、オシリスシャフトがある南側から大スフィンクスの位置する東側一帯と読みとれ(Hawass 1996: 394)、少なくとも末期王朝時代その一帯は「オシリスの家」として認識されていた。

このシャフトを「オシリスシャフト」と名付けるならば、一体いつから「オシリスの」シャフトと認識されるようになったのであろうか。シャフトは最初からオシリスシャフトとして入口が選定され、掘り始められたのか、或いは最初は単なる縦穴(或いは他の意図をもって)掘られ、オシリス神名が墳墓の碑文に多く登場するようになる第6王朝になって「オシリスの」の意味を帯びるのか、新王国時代にギザ一帯が「オシリスの家」と認識されるようになってから、或いはずっと後、石棺の納められたと推定される第26王朝の時期あたりにイシス神殿との関連性に伴ったものなのであろうか。ハワスの考察からオシリスシャフトは検出された土器群から古王国時代第6王朝からあり、新王国時代を経て第26王朝の頃には石棺が納められたことは確かである。しかし、検出された土器群はシャフトCからの遺物であり、その上部構造、入口部からシャフトBにかけての造営年代は不確かである。

ハワスによるオシリスシャフトの三層(A, B, C)の入口の位置をハサンの参道とそれを横切る通廊の図に重ね合わせてみると、シャフトBはシャフトAから南北軸と平行に8m程北に位置し、参道の道幅中央の下に位置する。シャフトCの入口はシャフトBから北東方向に2m程で、南北に走る地下通廊と参道の道幅北の交差点の真下にくることが分かる。あたかもシャフトBで参道を、シャフトCで地下通廊と参道の位置を重視したかのようなようである。下層での2度にわたる修正を経て参道と地下通廊の交差する地点に造られている(図6)。

## 2 クフ王ピラミッド内部との比較 ピット1/2, 洞穴

筆者が最も注目しているのはクフ王ピラミッド内部の下降通廊、上昇通廊そして王の間、王妃の間、重力軽減の間の三つの間に通じる大回廊、水平通廊と特にその結び目となるシャフトである(図7)。

ピット1は下降通廊と水平通廊、大回廊の三つの通廊のちょうど繋ぎ目にある(図8:A)。大回廊の北壁から55cmの西壁に深さ66cmの浅い穴があり、その西に88cmの通廊がある。シャフトは深さ7.96m幅71cmである。この幅は試し通廊の幅と実質的に同じである(Lehner 1985:

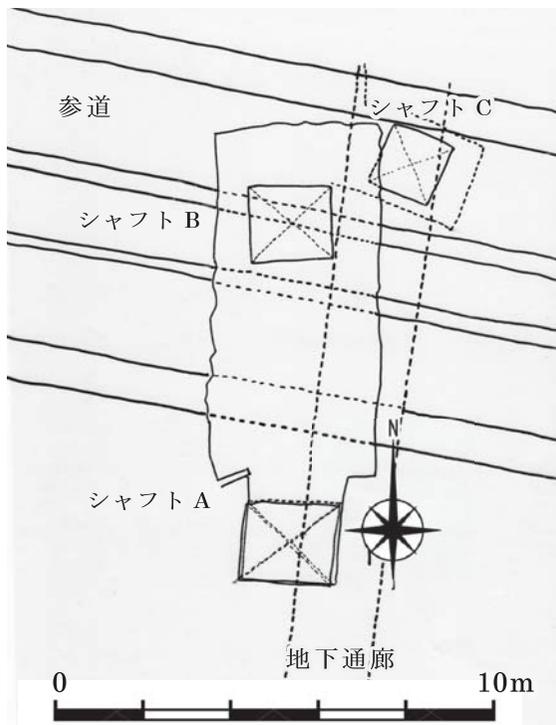


図6 シャフトと地下通廊及び参道

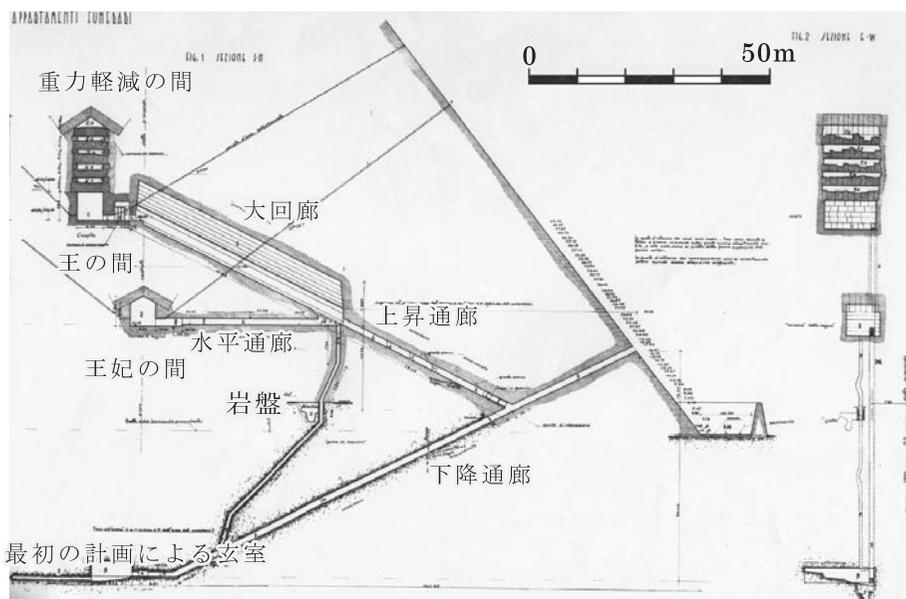


図7 クフ王ピラミッド (Maragioglio Rinaldi 1965 Tav. 3に加筆)

61)。ピット1はさらにピット2の開始部に向けてやや南方向に傾斜して7.90m更に下に延びている。ピット1の下部とピット2の上部を結ぶこの斜めのシャフトの造りは大変荒削りで、このことはもともと二つのピットがピラミッド内部の上部と下部を繋ぐ続きのシャフトではない事を意味する。ピット1は恐らく試し通廊が示すように、後にピラミッドの上部で上昇通廊、水平通廊、大回廊の接合点を示している。しかし実際の接合点ピット2は実際の中心線を外し、3.5m程ピット1の位置からずれてしまったと考えられている (Lehner 1985: 61; 図8: B')。このシャフトは大回廊の西壁から下に降りており (Maragioglio & Rinaldi 1965: Tav. 7), オシリスシャフトも西壁から突き出る形で造られている点が共通する特徴と考えられる (Maragioglio & Rinaldi 1965: Tav.5)。ピット2はピラミッドの地表面の岩盤 (Bedrock) から、ピット1は大回廊の入口、上昇通廊の終着点から、共に下降通廊に向かって垂直方向に別々に掘られている。ピット1の水平方向の位置は試し通廊の南側上昇通廊の入口の位置にほぼ (70~80cm北) 匹敵する (Lehner 1985b, Fig. 10)。

ピット1は深さ4.40mで底面は礫で覆われた自然の穴で、後にえぐり取られていわゆる洞穴 (grotto) が構築されている (Lehner 1985, 60下)。洞穴構築の工程は非常に重要な示唆を与えてくれる。洞穴はピットからまず南に、次いで東側に拡張するようにつくられており、拡張された部分から垂直下方向に新たなピット (ピットU) が数メートル掘られたところで放棄されている (図8)。その後さらに南にそして東側を再度拡張しようとした段階で放棄され、元のピットは石積みのようなもので封鎖され、洞穴部分と遮断されたように見受けられる (図8)。ピットUの幅は大回廊の両側壁面にある等間隔の縦線 (へこみ) 間隔の幅に等しく (図8: 矢印幅)、垂直方向に同じ位置にある。

ピット1 (図8: B) の地点は丁度大回廊が始まる部分の真下にあたるが、大回廊の通廊部分には僅かにかかっている。またピットは大回廊西壁の奥まった地点から下に降りており、東西方向には変化していないので、当然回廊の道幅中心の位置にはない (図9)。このことから洞穴は、大回廊の通廊の開始部分の真下にくるようまず南方向に拡張し、次いで大回廊通廊の道幅中心にくるよう東側に拡張されピットUが掘られたと推測できる。しかし、ピット1個分東側の位置はなお大回廊道幅中心の位置には及ばず、最終的には大回廊通廊道幅中間地点の垂直方向に相当する地点まで東側への拡張が試みられたが、何らかの理由で放棄されたと推測できよう (図8, 図9)。また、洞穴のピット1開口部南東方向すぐ側、ピットUの掘り込みにかかる位置に花崗岩製のブロックが辛うじてピットUに落ちずに留まっている。この花崗岩片の垂直上方向には大回廊開始部分、一段下がった床面のない窪み (住居という玄関の土間?) 部分に位置する。花崗岩片は洞穴の中でどのような意味をもつかは定かではないが、ピットUを掘り込む際の影響を受けていないとすれば、恐らく大回廊の開始部分を指し示すのではないかと思われる (図9)。また、洞穴はちょうどピラミッド底面、地表岩盤の真下の高さに位置する点も注目に値する (図8)。

最終的にピット2はさらに斜めに降りるシャフトに通じ、そのシャフトを最後まで降り切っ

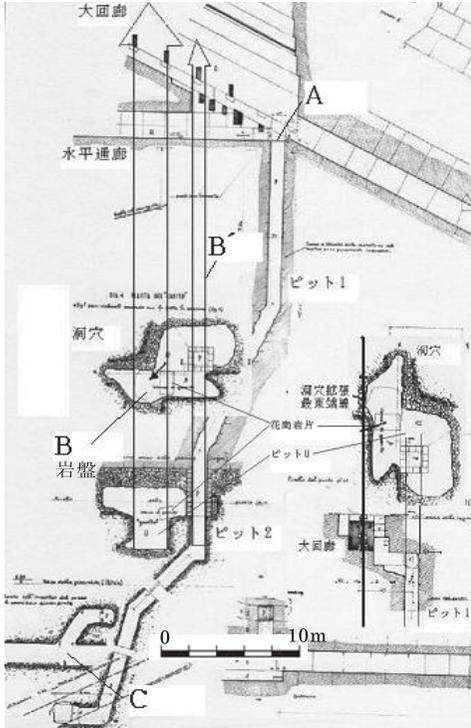


図8 平面図：ピット1/2及び洞穴 (Maragioglio & Rinaldi 1965 Tav. 3に修正加筆)

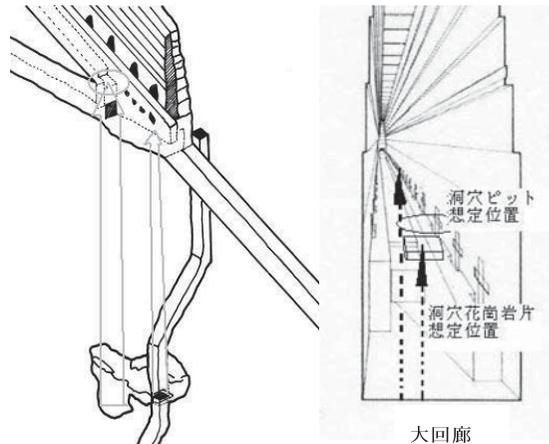


図9 立体図：ピット1/2及び洞穴の大回廊での垂直上想定位置 (Stadelmann 1985: 30に加筆)

たところで南東方向に短く延びる通廊でピラミッドの下降通廊に接続する (図8：C地点)。つまり、ピット1開始部で西側に奥まった分は一度は洞穴で東側に引き戻す試みがなされたが放棄され、結果的に最後で東側に戻されたと解釈できよう (表1)。このように、ピラミッド内部のピットはまず上昇通廊・水平通廊・大回廊の結び目西側奥から始まり (A)、斜めのシャフトによって垂直上方向、水平通廊と大回廊の分岐点 (B') を模索したが、さらに洞穴を掘り垂直上方向、大回廊の始まり部分に合わせるように南東方向に拡張しピットを掘り、実質的にピットは大回廊道幅中央にあたる位置まで拡張されたが途中で放棄されたとみえる。

### 3 クフ王ピラミッド複合体との関係から

カフラー王のピラミッド及び付属施設はクフ王のものが強く影響しており、その配置やレイアウトは注意深く練られている (Lehner 1985c: 151)。例えば、カフラー王の葬祭神殿は明らかにクフ王のピラミッド西側面の延長線上に位置している。また、ギザの三つのピラミッド (クフ・カフラー・メンカウラー) はそれぞれの東南角が一直線になるように配置されている (Lehner 1985c 143 fig. 8)。クフ王ピラミッド東南角から真南延長線上、カフラー王参道及びオ

表1 クフ王内部・オシリスシャフトの比較まとめ

ピット地点(図9)/シャフト(図6)	A	B	C	最深地点
クフ王ピラミッド	上昇/水平通廊 大回廊交差点 西側	大回廊 道幅 中心半分	下降通廊に 接続	30m
オシリスシャフト	地下通廊 西側	参道道幅 中心部分	地下通廊道幅 中心部分	30m

シリスシャフト側を超えてさらに南延長線上には第4王朝最後の王妃、ケントカウエスのピラミッドが建造されており、現在その一帯の調査が行われている（AERA 2011）。クフ王ピラミッド南側には東西に二つのポートピットがこれまで発見され、「第一の船」同様、「第二の船」のものとされる西側のピットを塞ぐ蓋石からクフ王に加えジェドエフラー王の名が検出され（柏木・吉村2011: 51頁）、ピラミッド南側の領域はクフ王の後継者達によっても重要視されたことが窺える<sup>5)</sup>。また、カフラー王の参道を横切る地下通廊と同様なものがクフ王ピラミッド参道にもみられる。

#### a) ヘテプヘレスの墓G7000x, GI-a 及び未完成ピラミッドGI-x

もう一つ考慮に入れなくてはならないのはヘテプヘレス1世の墓および衛星ピラミッドである。ヘテプヘレスの墓は1925年にレイズナー（G.Reisner）率いるハーヴァード大学・ボストン美術館合同調査隊により発見され、クフ王の衛星ピラミッドGI-aの北東角に入口があるシャフト墓G7000xである（Lehner 1985b）。シャフトの深さは約27mで5.22×2.67~2.77mの長方形の部屋が広がっている。埋葬室にはヘテプヘレスの寝具や家具等の様々な副葬品と共に王妃の石棺が見付かったが、ミイラは発見されなかった。ヘテプヘレスは夫であるスネフル王と共にダハシュールに最初埋葬されたが、墓が略奪に遭ったため息子であるクフによってギザに再埋葬されたという解釈がなされている。しかしダハシュールの墓は発見されておらずG7000xからの証拠だけに基いた推論でありはっきりしない。レイズナーは三つの王妃のピラミッドは同時に造られたと考えるのが妥当であるとしており、未完成のピラミッドGI-xは葬祭神殿を拡張し、参道の最後の部分を構築するために放棄されたとしている（Lehner 1985b: 84）。

ヘテプヘレスのピラミッドGI-aは最北端に位置し、衛星ピラミッドはクフ王ピラミッド南北の中心軸より南側に集中している。王にとって母の胎内を再び通る事が再生復活なのであり、母ヘテプヘレスのためのピラミッドとしてGI-aが最終的に選ばれたのだと言えよう。その意味ではレーナーは試し通廊を衛星ピラミッドの下部構造と考えているが、南北中心軸より北側にもともと王妃のピラミッドが建てられる予定はなく、大ピラミッド内部の模型、つまり単なるピラミッド建造のための模型である「試し通廊」は宗教的に重要でない北側に敢えて選ばれて建造されたのではないかと推測できる。試し通廊が衛星ピラミッドの地下構造として最北端に

立つことは考えにくく、また試し通廊がピラミッド内部を造るための模型だとすれば、少なくとも王妃のピラミッドやクフ王ピラミッド内部を造るより以前に造られたと考えるのが自然だ (Lehner 1985: Fig. 22)。レーナーはクフ王ピラミッドは上部構造、下部構造の通廊とも南北軸をとりつつ、列柱室を含む葬祭神殿及び河岸神殿へ向かう参道は東西軸を示しており、新しい建築物の配置構成が念入りになされたとしている。東西の配置が王の「西方の主人」或いは王のオシリスとしての命運という主題に影響しているにせよ (Ricke 1950: 42-7)、星辰信仰より太陽信仰の優越性があったにせよ、葬祭神殿の拡張を始めとした東西を意識した配置は明らかにクフ王のピラミッドが完成し、王妃のピラミッド GI-a が完成した後に築かれた。東墓地北側の配置変更はクフ王のピラミッド複合体完成の最終局面を示しており、王妃のピラミッドはあたかも置き去りにされたようである。葬祭神殿の拡張は象徴的な衛星ピラミッドに同等かそれに反するように行われたと指摘している (Lehner 1985b: 83; Brested 1912: 100-117)。クフ王の後半の東西軸を意識した配置への変化はカフラー王のピラミッド複合体にも強く影響を及ぼしたのではないかと思われる。

## b) 試し通廊 trial passage

ハワスはシャフトがクフ王ピラミッドの東墓地のほぼ真南に位置していることから新王国時代以降から末期王朝時代を通じてイシス神殿との関係性に注目しているが、古王国時代においては真南に位置しているのは王妃のピラミッドや試し通廊も同じに関連性が元々高かったのではないかと考える。試し通廊は王妃ヘテプヘレスの墓の程近く、クフ王の3つの衛星ピラミッドの北側に位置し、南北の中心軸より僅か10m程東にある (図1)。オシリスシャフトからの距離を考えれば、試し通廊は3つの衛星ピラミッドとほぼ同一線上、真北に位置すると考えて良いだろう。つまり試し通廊の延長線上おおよそ南にオシリスシャフトの入口のある通廊は位置する。試し通廊はペリング (J.E.Perring) とバイス (H.Vyse) が研究し、彼らは第4番目の衛星ピラミッドの始まり部分つまり下部構造と考えた (Lehner 1985b: 45; Perring 1839-42; Vyse 1840-42)。ピートリ (W. M. F. Petrie) は通廊をクフ王のピラミッド内部の通廊のモデルと考えた。ピラミッド内部と比較し得る特徴は上昇通廊と下降通廊、大回廊の始まり部分である。この通廊は長さ22mで深さは10mある (Lehner 1985b: 48 Fig. 11)。大回廊の入口は王妃の間に通じる水平に延びた通廊の始まりである。試し通廊のシャフトは下降通廊と上昇通廊の繋ぎ目に向かって垂直に降りているが、レーナーは位置は大回廊の始まり部分と違うもののピラミッドのシャフトに相当すると考えている。試し通廊の下降通廊と上昇通廊がつくる傾斜角度、高さ、幅はピラミッド内部のものと全く同じであり、ピラミッド内部を造るための模型と考えられている (Lehner 1985b: 48; Petrie 1883: 15-16)。試し通廊の西側に平行して西端から5.7mのところ長くて狭い試掘坑が岩肌削られている。レーナーの観察によるとこの試掘坑は試し通廊に付随しており、幅も試し通廊のシャフトと殆ど同じであると指摘している。こ

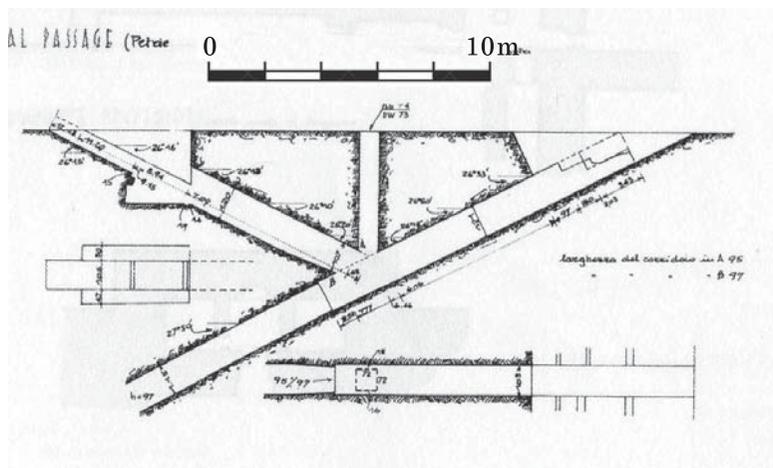


図10 試し通廊 (Maragioglio & Rinaldi 1965: Tav. 9 Fig. 6に加筆)

の試掘坑は衛星ピラミッドの南北の中心軸上にあり、試し通廊がその中心軸から東に平行してある。つまり大ピラミッドの通廊がピラミッドの南北の中心軸より7.3m東側にあることから (Yoshimura *et al* 1987: Fig. 3), 試掘坑はピラミッドの南北の中心軸を示すものと考えられる (Lehner 1985b: Fig. 12, Fig. 23; 図10)。

試し通廊のシャフトは通廊の下降通廊の通廊幅の中心に向かって掘られており、シャフトが通廊と一体となっている印象を受ける。オシリスシャフトは地下通廊の中心ではなく奥まった部分に入口を持ち、シャフトが参道を横切るための通廊を妨げることがないように造られたと思われる。しかし先に示したように、第2層と第3層のシャフト入口は参道と地下通廊の交差点にくるようにあたかも修正されるように位置している。またハウスは切り合い関係から通廊が完成してから後に掘られたと推察している (Hawass 2007: 380 fig. 1)。この構造はクフ王ピラミッド内部の上昇通廊と大回廊の入口の接点に造られたシャフトの入口部が西側壁面から奥まった地点に造られた点と類似する (図8)。シャフトは地下通廊の北側入口でも参道直下の中心付近でもなく南側入口に程近い位置にある。これは試し通廊では上昇通廊から地上に出る部分、水平通廊の模型と思われる部分との交差点にあたり、クフ王ピラミッド内部で言えば王の埋葬室、王妃の間、地下の間の三つの主要な部屋に通じる上昇通廊・水平通廊・大回廊が交差する言わば結び目を決定する重要な意味をもつピット1に相当する (図8)。シャフトの位置で言えば試し通廊よりはピラミッド内部の構造に類似しているといえる。レーナーは試し通廊のシャフトは下降通廊と上昇通廊の結び目にあり、シャフトの位置は異なるもののピラミッド内部のピット2にあたるとしている (Lehner 1985b)。

#### 4 カフラー王ピラミッド複合体とオシリスシャフト

オシリスシャフトはカフラー王のピラミッド参道下にあり、当然触れなければならないのはカフラー王のピラミッド内部構造との比較である。ジェドエフラーに続き、カフラー王の玄室がピラミッド底部の高さ中央に位置し、クフ王のものとは完全に異なっている。下部の入口を下ると水平通廊があり、その途中に最初の計画による玄室とみられる部屋があり、シャフトはない。シャフトがない点を除けばオシリスシャフトのある地下通廊の構造に似ている。筆者はカフラー王のピラミッド西側中央付近、石切り場遺構の王の埋葬室とほぼ同じ高さにある息子ネブエムアケトの墓の碑文是最古のオシリス神名を含むと考えている(平山 2011)。カフラー王のピラミッド及び複合体はクフ王のピラミッドとその複合体の配置が大きく影響している。カフラー王のピラミッド葬祭神殿は明らかにクフ王のピラミッド西縁の延長線上に配置され、先にも述べたように三つのピラミッド(クフ・カフラー・メンカウラー)の東南角は一直線上になるように配置されている。またスフィンクスの位置もクフ王参道の中程にある参道を横切る通廊の南に位置する。オシリスシャフトはカフラー王のピラミッド参道中程に位置する。参道はピラミッド建設時には河岸や港から建設に必要な部材を運ぶスロープとして使われ、ピラミッド完成後に壁が出来、屋根が付けられ、葬祭神殿と河岸神殿を結ぶ通廊として用いられるようになった。アワディーはチェコ隊のアブシール発掘報告書の中でピラミッド参道について詳しくまとめており、参道は大きく二つのタイプに分類されるとしている。ひとつは「メイドゥーム」タイプであり、もうひとつは「クフ」タイプである。参道はメイドゥームとダハシュールのスネフル王のピラミッドから確認でき、Open Airつまり屋根のない低い壁のタイプであった。クフ王になって初めて壁と屋根で囲まれ、壁には装飾が施された。そしてこの二つのタイプの間の変遷を示すものはないと指摘している(El Awady 2009: 91)。参道を横切る地下通廊がクフ王までみられない理由は参道の壁が低く必要がないからであり、逆にカフラー王の参道もクフ王のものを踏襲し屋根・壁が造られた。つまり、カフラー王参道の地下通廊は参道を横切るために参道の建造に伴って造られたことの裏付けとなろう。ハワスは古王国時代末期から第一中間期初めにかけて参道の破壊が始まったであろうと考えている(Hawass 1987: 191)。基礎が部分的に破壊されたものの河岸神殿から葬祭神殿までの痕跡はほぼ残っている(El Awady 2009: 102f)。つまり、南北に走る通廊はこの後出来たか、或いは壁が出来て南北の横断が困難になる事を見越して事前に造られた可能性が高い。少なくとも壁が破壊された後に造られたとは考えにくい。

また、グリマルはピラミッド内部構造(下降通廊、上昇通廊、ピット、埋葬室)はピラミッド複合体(河岸神殿、参道、葬祭神殿)に相当することを図示している(Grimal 1988: 125)。この事が成り立つとすれば、参道はちょうどピラミッド内部の下降通廊、上昇通廊にあたる。クフ王ピラミッド内部のシャフト(ピット)は水平距離にして入口から埋葬室のちょうど中間地点にあり、参道の中間地点に相当する。クフ王ならばピラミッド内部にあるシャフトの役割

を、カフラー王では参道の中腹に求めたのではないかと推測できる。シャフト（ピット）は結び目を見出す役割があり、カフラー王はクフ王との結び目を求めたともとれる。修正は垂直方向にも水平方向にも行われ、クフ王ピラミッド内部ではシャフトが斜めに掘られている。シャフトは結び目を求めて、修正しながら、クフ王の場合斜めに、下降している。メンカフラーは結び目の修正が2度行われている（Stadelmann 1985: 143）。

では、地下通廊は「試し通廊」つまり、カフラー王のピラミッド内部構造の模造（レプリカ）なのであろうか。カフラー王ピラミッド内部は下降通廊、水平通廊、上昇通廊から成るが（Stadelmann 1985: 37a）、地下通廊はクフ王ピラミッドの試し通廊のようにピラミッド内部の正確な縮図とは程遠い。通廊の両端にあたかも下降通廊、上昇通廊のように通廊が傾斜しているが、参道の土台の下をくり抜いた際に必然的に出来る地形的な影響が強く、故意に造られた傾斜ではなさそうだ<sup>6)</sup>。従って、カフラー王ピラミッド内部を示す「試し通廊」とは言えそうにない。クフ王の試し通廊やピラミッドそのものにみられる精緻な設計を行うエジプト人が、シャフトに関しては修正を数度行いながら目的点に到達するなど、周到に計画されていないように見受けられるが、その理由は不明である。

## まとめ

以上、オシリスシャフトをとりわけ地下通廊との関係からクフ王のピラミッド及びその東側の遺構衛星ピラミッドや試し通廊との比較検討を試みた。オシリスシャフトのある地下通廊はカフラー王参道を南北に横切る通廊として建造され、その後通廊の南側入口程近くの西壁に地上から地下通廊を貫通する形でシャフトが掘られた。地下通廊及びオシリスシャフトはクフ王ピラミッド南東角の南、カフラー王ピラミッド参道の間地点といずれも両者にとり大変重要な「夜明け」の方角であり、天空を航行するための二隻の「太陽の船」が埋葬されるなど、クフ王ピラミッド南側とカフラー王参道に挟まれた領域は王の再生復活のために大変重要であった。オシリスシャフトのある地下通廊は建造当時から単なる参道を横切る通廊として造られたのではなく、クフ王ピラミッド及びその複合体を意識して造られたものであろう。オシリスシャフトの建造期は最も早くてシャフトCから検出された土器群から第6王朝と推定されているが、参道が造られた直後に遡る可能性がある。その後、新王国時代、末期王朝時代に至って取り分け第2層、第3層は大規模な拡張・造営が行われ、再利用されたものと思われる。シャフトの下部構造よりも入口の位置が選定された時がオシリスシャフトの性格を示すもっとも重要な時である。シャフトAは地下通廊の西壁にある点はよりクフ王ピラミッド内部のシャフト（ピット）入口に類似しており、シャフトBは参道幅中央下に、シャフトCは参道及び地下通廊の交差点の下に位置していることから、オシリスシャフトと地下通廊、カフラー王参道は密接に関係していることが窺える。このように重要な起点に向かってシャフトの位置が修正されながら下に掘り進められている点はクフ王ピラミッド内部、メンカウラー王のピラミッド内部

のシャフトにも見られる特徴である。しかもクフ王ピラミッド内部のピットはオシリスシャフト同様、まず大回廊の下、次いでピット2の途中で構築された洞穴は大回廊道幅中心を求めるように南東方向に拡張され、ピットが掘られ途中で放棄された形跡があり、ピットは最終的にさらに下ったところで下降通廊と接合している。オシリスシャフトと地下通廊はクフ王参道の地下通廊とクフ王ピラミッドの内部構造の模型とされる試し通廊の両者の性格を併せ持つていると考えられ、ピラミッド内部を具現化するという性格も持ち合わせているのではないかと推察できる。さらにシャフトBとCはカフラー王参道直下の中間に位置する事から東西軸の中心も重視している。ピラミッドの下降通廊、上昇通廊、ピット、埋葬室という構造がピラミッド複合体の河岸神殿、参道、葬祭神殿に比類するならば、オシリスシャフトはちょうどピラミッド内部のシャフトと捉えることも出来よう。クフ王の後継者ジェドエフラーのピラミッドでピラミッドの内部構造は大きく変遷しており、カフラー王以降にも大きく影響している。カフラー王のピラミッド内部にはシャフトがないことから、オシリスシャフトがその役割を担っているのかもしれない。直接的な証拠に乏しいが、以上の点からオシリスシャフトは古王国時代の崩壊期に建造されたというよりも、カフラー王により地下通廊、参道とともに一体として築造され、クフ王ピラミッド内部構造を意識した可能性が高いのではないかと推察できる。先にも述べたように、最下層部屋Iは北側に北西方向に延びる通廊が確認されており、現在9m程掘り進められている。この通廊の深さは30mと考えられ、クフ王ピラミッドの控えの間の深さ30mと一致しており、通廊がこのまま水平方向に真直ぐ進めば、控えの間からさらに延びる通廊に繋がる可能性がある。近年のギザ台地の水没により大変な困難が予想されるが、発掘調査が進展すれば出土遺物によってはシャフトの性格や造営時期など多くのことがより明らかになり、今後に期待される。

## 謝辞

本稿は日本西アジア考古学会で学会発表したものをまとめたものである。草稿にあたり当学会の高宮いづみ先生、西本真一先生のご助言を頂きました。ここに感謝いたします。

## 注

- 1) Hassam 1950 Giza VI part 3: The Giza Archives: Museum of Fine Arts, Boston より
- 2) <http://www13.plala.or.jp/ramesses2/2005osiris.htm>
- 3) <http://www13.plala.or.jp/ramesses2/2005osiris.htm> よりハワス氏追跡動画参照。
- 4) ハワスによる記述のみで出土状況その他が示されていない。
- 5) レーナーはスフィンクス位置はカフラー王のピラミッド南側面の東西軸の東側延長線上と、スフィンクスの尻の部分クフ王ピラミッド東側墓地に連なるマスタバ墓の西から2列目(7210, 7220, 7230)と3列目(7330, 7340, 7350)の間を通ると想定される南北線の交差点に位置すること

を図示している (Lehner 1985c: 143 fig. 8)。筆者が着目している、クフ王ピラミッド参道を横切る地下通廊はレーナーの示す南北線よりマスター一列分東、つまり3列目 (7330, 7340, 7350) と4列目 (7410, 7420, 7430, 7440, 7450) の間に想定される南北線の延長上にある (Porter & Moss 1974: Plan XVIII)。この線を南に延長するとやはりスフィンクスの胴体後ろ部分に突き当たり、さらにカフラー王ピラミッド参道と交差する。この想定線と参道の交差点とカフラー王葬祭神殿までの丁度半分の距離にオシリスシャフト及び地下通廊がある。このような配置関係、参道の間地点を縦に横切るオシリスシャフトのある地下通廊はクフ王のピラミッド参道に造られた、いわゆる地下通廊 (subway) と同じ性格をもつと推測される。

6) [http://www.bibliotecapleyades.net/piramides/tumba\\_osiris/shafted2.htm](http://www.bibliotecapleyades.net/piramides/tumba_osiris/shafted2.htm) 写真参照

## 参考文献

- AERA (Ancient Egypt Research Associates) 2011 *Annual Report* 2010–2011 “The 2011 Field Season Excavations: The Khentkawes Basin and the Town Beyond” pp. 6–9. Boston.
- Awady, Tarek El 2009 *Abusir XVI Sahure-The Pyramid Causeway, History and Decoration Program in the Old Kingdom*, Charles University in Prague.
- Breasted, J.H. 1912 *The Development of Religion and Thought in Ancient Egypt* (Harper and Row 1959 ed.). New York.
- Edwards, I.S.E. *The Pyramids of Egypt*, Harmondsworth, Middlesex : Penguin ed. 1961
- Grimal, N. *A History of Ancient Egypt* (translated by I.Shaw 1992): Blackwell Oxford. 1988
- Hassan, S. *Excavations at Giza VI: 1934–1935. Part 3: The Mastabas of the Sixth Season and their Description*. Cairo: Government Press. 1950
- Hawass, Z. *The Funerary Establishments of Khufu, Khafra and Menkaure during the Old Kingdom*. Ph.D dissertation University of Pennsylvania, Philadelphia. 1987
- Hawass, Z. “The Discovery of Satellite Pyramid of Kufu (GI-d)” In *Studies in Honor of William Kelly Simpson I*, ed. by P. der Manuellian, Museum of Fine Arts, Boston. 1996 pp. 379–398.
- Hawass, Z. “The Discovery of the Osiris Shaft at Giza” in *The Archaeology and Art of Ancient Egypt. Essays in Honor of David B. O’Connor*, Volume I: 2007 pp. 379–397.
- Jones, M. and A. Milward 1982 Survey of the Temple of Isis, Mistress of the Pyramid, at Giza, Season: The Main Temple Area. *The Journal of the Society for Study of Egyptian Antiquities* 12: 1980 pp. 139–150.
- Lehner, M. *The Complete Pyramids*. London 1995
- Lehner, M. “The development of Giza Necropolis Khufu Project” *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo (MDAIK)* 41: 1985a
- Lehner, M. *The Pyramid Tomb of Hetep-heres and the Stellite Pyramid of Khufu*. Deutsches Archäologisches Institut, Abt. Kairo, Sonderschrift 19. Mainz am Rhein: Philipp von Zabern. 1985b
- Lehner, M. “Giza. A Contextual Approach of the Pyramids.” *Archiv für Orientforschung* 32 (1985): 1985c pp. 136–158.
- Maragioglio, V. & C. Rinaldi *L’Architettura delle Piramidi Menfite 4. Le Grande Piramide di Cheope*. Testo/Tavole. Tipografia Cabessa: Rapallo. 1965
- Perring, J.E. *The Pyramids of Giza (From Actual Survey and Measurement)* (3 pts.). London 1839–1842
- Petrie, W.M.F. *The Pyramids and Temples of Gizeh*. London: Histories & Mysteries of Man Ltd. London : Field and Tuer 1883
- Porter, B. & Moss, L. B. R.: *Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs and*

- Paintings III Memphis*, Oxford. 1974
- Ricke, H. *Bemerkungen zur ägyptischen Baukunst des Alten Reiches II. Beiträge zur ägyptischen Bauforschung und Altertumskunde* 5. Cairo. 1950
- Saleh, A.-A. 1974 “Excavations Around Mycerinus Pyramid Complex.” *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo (MDAIK)* 30 (1974): pp. 131-154.
- Stadelmann, R. *Die Ägyptischen Pyramiden*, Darmstadt 1985
- Vyse, H. *Operations Carried on at the Pyramids of Gizeh* (3 vol.). London. 1840-42
- Yoshimura, S., S.Tonouchi and T.Nakagawa *The First International Symposium on the Application of Modern Technology to Archaeological Exploration at the Giza Necropolis: Substance of Speech*, Tokyo. 1987
- Zivie, C.M. *Giza au Premier Millenaire, Autour du temple d'Isis dame des Pyramides*, Museum of Fine Arts, Boston 1991
- Zivie, C.M. “Encore Ro-setaou.” *Journal of Egyptian Archaeology (JEA)* 70 (1984): 1984: 145.
- 柏木裕之・吉村作治 『蓋石取り上げ作業の概要—2011年度エジプト・クフ王第2の船復元プロジェクト—』 考古学が語る古代オリエント～第19回西アジア発掘調査報告会集～西アジア考古学会 2011: 48-52 頁
- 平山 洋 「最古のオシリス神名登場は第4王朝末期まで遡るか？—ネブエムアケト墓の銘文から」 『オリエント』 54巻2号2011: 63-73 頁

# “Osiris Shaft” Reconsidered: Comparative Analyses with Khufu’s Pyramid at Giza, its Complex and their Passages

Hiroshi HIRAYAMA, Seiji MORIYA

## Abstract

A vertical shaft about 30m depth was discovered at Giza in the passage crossing approximately half of the causeway of the Pyramid of Kahfre. Recently Hawass excavated the shaft and revealed that it is consisted with three layers. Hawass named it “Osiris Shaft” because later the area around Giza became the place called “the house of Osiris” and the association with the temple of Isis attached to one of satellite pyramids of Khufu. It seems to me that the shaft is a part of the passage under the causeway of Khafra because of its positions. It also probably relate to other remains in the east side of the Great Pyramid because they are all along the same N-S axis from the shaft. Among them ‘the trial passage’ might be important because of the same function like a passage with vertical shaft. It is regarded as a replica of the interior of the Khufu’s pyramid. Not like a ‘subway passage’ only to cross the causeway like that of Khufu but the Osiris shafts might have special meaning from the Old Kingdom.

**Keywords:** Osiris Shaft, the 6 dynasty’s Red Polished Potteries, Passage, Khufu’s pyramid, the trial passage